

『粤甸幽霊集録』における神

——モンゴルの侵略を通して——

佐野愛子

一 はじめに

ベトナムの陳朝（一二二六～一四〇〇）の開祐元年（一三二九）に李済川によって編纂された『粤甸幽霊集録』²は、ベトナムの地（粤甸）にいる神々を「歴代人君（八位）」、「歴代人臣（十二位）」、「浩気英霊（十位）」の三つにわけ、その計三十位の神の事跡（目録を参照）を記した書である。本書の最大の特徴は、その話の末尾に陳朝が重興元年（一二八五）、同四年（一二八八）、興隆二十一年（一三二三）に、それぞれ皇帝が与えた神号を記録している点である。

本書は後世に、多くの人物によって増補、削除および改稿などの手が加わってはいないものの、『交州記』、杜善の『史記』および『報極伝』³といった李朝（一〇〇九～一二二六）以前の現存していない資料等を典拠にして編纂されており、陳朝時代以前の祭祀体系を探る上で重要な書といえる。

それでは陳朝以前のベトナムではどのような神が祭祀されていたのであろうか。本論文では、『粤甸幽霊集録』に登場する神を分類することで、どのような神が国家祭祀の対照となっていたのかを明らかにしたい。

・『粤甸幽霊集録』目録（計三十位）

歴代人君（附后妃）（八位）⁶ 歴代人臣（十二位）⁷

浩気英霊（十位）

一 嘉応善感靈武大王 七 威明顕忠大王 十八 応天化育元君

- 二 布蓋彰信大王 八 校尉威猛大王 十九 広利大王
- 三 趙越王後李南帝 九 太尉忠輔公 二十 盟主昭感大王
- 四 社壇帝君 十 国都城隍大王 二十一 開元威顕大王
- 五 微聖王 十一 洪聖佐治大王 二十二 冲天威信大王
- 六 貞烈夫人 十二 都統匡国王 二十三 佑聖顕応王

- 十三 太尉忠惠公 二十四 開天鎮国大王
- 十四 却敵威敵二大王 二十五 忠翊威顕大王
- 十五 証安佑国王 二十六 善護国公
- 十六 回天忠烈王 二十七 利済通霊王
- 十七 果毅剛正王

二 李済川と『粤甸幽霊集録』の編纂

『粤甸幽霊集録』を編纂した李済川は序で、どのような神を記録したかを述べる。

粤甸幽霊集録序

古聖人曰、聡明正直足以称神。非淫祠邪崇、濫得而称也。我皇粤宇内諸神、古来多矣。能彰厥績、陰相生靈者、有幾哉。然從來品類不等。或山川精粹、或人物傑靈、騰氣勢於當時、綏英靈於来世。若不紀寔、朱紫難明、因隨淺見早聞、編集成書。或

好事者、尚其正之。是所望也。

皇陳開祐元年己巳孟春上澣

守大蔵書文正掌中品奉御安暹路転運使李濟川敬序

李濟川はベトナムには古来より神が多くいるものの、その功績が明らかかなものや陰からベトナムの人々を手助けするものはどのくらいいるだろうかと述べる。そして功績のある神々の事跡を記しておかなければ、その神の正邪の区別がつかなくなってしまう。そのため『粵甸幽霊集録』を記したのだという。

さて『粵甸幽霊集録』を編纂した李濟川であるが、実のところその他の史書には記載がなく、彼の人物像は杳として知れない。ただ彼の職歴が、「守大蔵、書文正掌、中品奉御、安暹路転運使」であったことがみられる。

しかしながら、ベトナムにおいてこれらの職が、どのような役割を果たし、どのような位置を占める職種なのかを知るすべはほとんどない。とはいえ、「中品奉御」に関しては『安南志略』の近侍官の役職の一つとして、中品奉御が載っており、李濟川は帝の近くで仕えた官であることがわかる。

また「守大蔵」は諸本に「守大蔵経」ともあり、李濟川は大蔵経の管理に関わる仕事にたずさわっていたようである。彼が『粵甸幽霊集録』を編纂したことに鑑みれば、經典以外に、本書を編纂するための書物に關しても、彼は管理もしくは自由に閲覧できる立場だったとみてよいのではないだろうか。

以上みてきてわかるように、ほとんど詳細のわからない李濟川であるが、彼は功績のある神の事跡を後代のために『粵甸幽霊集録』に記した。この「功績」とはいったい何を示すのであろうか。

先行研究では『粵甸幽霊集録』の話の末尾にはほすべてに記載がある三つの年号から、『粵甸幽霊集録』の神は対外戦争勝利に關与した神であるとする。つまり重興元年は第二次モンゴル侵略(紹宝六年(一二八四)～七年(一二八五))勝利の年に、同四年は第三次モンゴル侵略(重興三年(一二八七)～四年(一二八八))勝利の年に、そして興隆二十一年は占城親征(興隆十九年(一二三二)～二十年(一二三三))勝利の翌年にあたる。

十三世紀のモンゴル帝国の領土拡大にともなう侵攻がベトナムにとって大きな脅威であったのはいうまでもないが、ベトナムにとってチャンパーとの戦争は、ベトナムが南進する上で、避けてはとれない重要な戦いであり、ベトナムでは戦勝のために祭祀がおこなわれたであろうことは疑いない。

さらに〔Taylor 1986〕は李濟川が『粵甸幽霊集録』を編纂した開祐元年という年にも着目し、この年が陳朝の第五代皇帝である明宗(在位一三二四～一三二九)が退位し、第六代皇帝憲宗(在位一三二九～一三四一)が即位した年であることの重要性を指摘する。

またその明宗の即位年をみると、それが『粵甸幽霊集録』において、チャンパー親征に勝利した後、各地の神に一斉に神号を贈号した興隆二十一年の翌年であることがわかる。興隆二十一年は明宗の父である四代皇帝英宗(在位一二九三～一三一四)の年にあたる。ここで重要なことは英宗は幼いころに第二次、第三次モンゴルの侵略を経験した人物であるということである。

重興元年(一二八五)	モンゴル撃退	② 聖宗(在位一二五八～一二七八)
重興四年(一二八八)	モンゴル撃退	←
興隆二十一年(一二三三)	チャンパー親征	④ 英宗(在位一二九三～一二三四)

開祐元年（二三二九）

⑤明宗（在位二三二四～二三二九）
⑥憲宗（在位二三一九～二三二四）

つまり英宗は、『粵甸幽靈集録』の最大の特徴である末尾の三つの年号とすべて関係のある唯一の皇帝なのである。そのことから、[Taylor 1986]は李済川を英宗のもとで仕えた人物で、明宗の退位後に明宗に『粵甸幽靈集録』を呈呈したのではないかと推定する。想像をたくましくすれば、ベトナムにとって重大な三つの対外戦争を乗り越えた英宗を称えようとしたのが、『粵甸幽靈集録』という書の編纂だったのである。

このように『粵甸幽靈集録』は陳朝時に経験した重大な対外戦争と関わって編纂がされており、そこで功績のあつた神が記された書といえる。とはいえ、『粵甸幽靈集録』に名のある神は決して対外戦争に関わる神だけではない。事実は、対外戦争以外の功績のある神も多く登場する。本論ではそれらの神をとりあげることにより、さらに『粵甸幽靈集録』に記録された神の意味を明らかにしてゆきたい。

三 対外戦争に関する神

本論文は、『粵甸幽靈集録』に収録された対外戦争以外の神をみてゆき、陳朝以前の祭祀状況を探ることを目的とするものであるが、ここではひとまず、『粵甸幽靈集録』の編纂理由ともつとも関わりのある対外戦争に関する神に関してみてゆく。

はじめに『粵甸幽靈集録』の特徴である神号が付与された年に起きた出来事を記す唯一の話である十六話「証安佑国王」を引用する。

十六 証安佑国王⁽¹⁶⁾

按『史記』、王姓李名服蛮、佐李南帝、官將軍、以忠烈名。守杜洞、唐林二処、夷獠不敢犯、方民案堵。卒後、立廟祀之。

李太祖巡遊、過古所步頭、見江山清秀、心神有感、洒酒于江曰、「朕觀此方、山奇水秀、地靈人傑、受此歆享」。倅見異人、肥大状貌、熙怡稽首、再拜曰、「臣本鄉人、姓李名服蛮、生平忠烈。上帝嘉之、敕守此土。唐高祖時、臣常率鬼兵、陰助邱和、破逆賊寧長真于炭山口。肅宗時、臣陰助破長波斯于神石口。代宗時、臣陰助、破崑崙閣婆賊于朱鳶。又高駢破南詔、吳王破南漢、黎大行破宋兵、臣皆預有陰助之力也。今陛下令臣得守旧職」。帝立祠塑像封為福神。

至陳元豊間、韃靼入寇至其境、馬蹶不進。村民相率拒戰。賊奔散。賊既平、詔封神為証安国公、所在民為護舍、準免兵徭。
重興元年、北人復入寇、所至殘破。及經過此邑、秋毫無犯、如有保護者。賊既平、敕封「証安王」。四年、加「明応」二字。
興隆二十一年、加「佑国」二字。

六世紀に起兵し中国の梁をベトナムから追い出し、南方の林邑（現在のベトナム中部にあつた王国⁽¹⁶⁾）を撃退し、国号を万春としベトナムで初めて帝と称した李南帝に將軍として仕えた李服蛮という人物の話である。彼はその忠烈心を嘉されて死後も廟を立てられ祀られていた。李太祖（在位一〇〇九～一〇二八）がちょうど李服蛮の祀られた場所を巡遊した際に、李服蛮は太祖の前に現れて、自身の功績を述べてまた以前のようにこの地を守る仕事をさせるようにと述べる。太祖はそれに応じて李服蛮のために祠を立てて像をつくり福神に封じる。

重興元年には、北人が再び侵攻してきたことが記される。それによって多くの場所が破壊されたが、李服蛮の守る杜洞、唐林の二箇所だけは、彼が生前に夷獠からその地を守っていたように無事であった。そのため、賊を追い払った後に「証安王」に勅封されたのである。ここで「北人」

とされるのは、その前の(元豊年間(一二五一～一二五八)の記述により「韃靼」をさすことが読み取れる。韃靼はすなわち、十三世紀にユーラシアの東西南北の広範囲を支配したモンゴル帝国のことである。ここでも李服蛮は侵攻するモンゴル軍の馬をつまづかせて進めなくし、村民が彼らを撃退する手助けをする。

『粵甸幽霊集録』の末尾に記載される年号が、対外戦争と関わりがあるのは、先行研究にも指摘のあるとおりである。本話には元豊七年(一二五七)にあった第一次モンゴル侵略に関する記述もある。

さて本話で興味深いのは、李太祖の巡遊の際に李服蛮が自身の功績を伝えるために現れる場面である。李服蛮は李南帝に仕え、死後もモンゴル軍の侵攻を撃退したが、その他にもベトナムが危機にさらされるたびに、その窮地を救ってきたことを彼は太祖に告げる。中でも二重傍線部の人物たちに関しては、『粵甸幽霊集録』は彼以外にも多くの神が手助けに現れたことを記述する。

八六四年に安南都護となり南詔を討った高駢に関する話は一話、八話、十七話、二十六話にある。また高駢は他に十話、十九話と『粵甸幽霊集録』の中では、合計七話ともっとも登場回数が多い人物でもある。

呉王、すなわち呉権(在位九三九～九四四)が南漢を撃退した話は二話と十四話にある。黎大行(在位九八〇～一〇〇五)が宋を撃退した話は本話にしかみられないが、十一話「洪聖佐治大王」に獄神として祀られる范巨倆が、生前に黎大行のチャンパー親征にしたがって武功をあげた話がある。

このようにみてゆくと、『粵甸幽霊集録』に収録されている話の半数以上が、対外戦争時にいかに神がそれを手助けしたかを記述したものであることが指摘できる。とはいえ、十一話「洪聖佐治大王」でチャンパー親征で功績のあった范巨倆が、死後は獄神として祀られたように、『粵

甸幽霊集録』に記載される神は決して対外戦争に関わりのある神ばかりではない。

四 国家安寧と『粵甸幽霊集録』の神

ここからは、『粵甸幽霊集録』にある対外戦争以外に功績のある神をみてゆく。まずは、『粵甸幽霊集録』でもっとも登場回数が多い高駢をとりあげよう。先に触れたとおり、高駢は南詔の討伐に関する話がほとんどであるが、それ以外にも羅城を築いた(八六六年)際の話がある。そのうち十話「国都城隍大王」では、神の話を聞いた高駢がその神を祀ったという話だが、十九話「広利大王」は、南詔からベトナムを救った英雄的な側面をもつ高駢とはいささか趣の異なる内容が載る。

十九 広利大王

王本龍度王氣之君也。昔高駢築羅城時、一日方晡、駢出游城東、忽然雲霧大作、見五色氣自地出、光芒奪目。有一人、冠裳嚴整、騎赤蛟、手執金簡、隨光氣升降、異香襲人、宛轉往來、片辰而變。駢驚異、以為妖氣、欲以法鎮之。夜夢神來告駢曰、「吾非妖氣、吾是龍度王氣也。見公築城、故相見耳」。駢覺、令以銅鉄為符、埋而压之。是夜、雷雨大作、掘起銅鉄、碎如塵土。駢大驚、無計可施。後土人立祠奉祀、尊為龍度福神。(中略)重興元年、敕封「聖佑」二字。四年、加「威濟」二字。興隆二十一年、加「孚感大王」。

高駢が羅城を築いていた際に、城の東を巡遊していると、不思議な現象にでくわす。高駢はそれを妖気と思い、龍度王氣の言葉も聞き入れずに符を埋めて神を鎮圧しようとする。そんな高駢の前に、龍度王氣は激

しい雷雨がおこり高駢の鎮めた符を掘り起こし、碎いて灰燼に帰すといふ靈異を見せつける。

南詔を撃退した高駢は、諸本によつては「高王」とさえ崇められる人物であるが、本話での高駢は、ベトナムの神を鎮圧しようとする圧制者の姿をみせる。二十六話に「好鬼神之事」とも記される高駢は、ベトナムの地脈を探る風水師の役割をも担っているが、ベトナムの神々と親交を深める話のある反面、それがうまくゆかない場合は神を押さえつけようとする手段にでる。

このように高駢にはベトナムの神に対して二面性をもっているわけであるが、[Taylor 1976]は高駢を侵略者からベトナムを守る守護者としての側面からのみ評価する。しかし本話に関しては、高駢にそのような面はみられない。むしろここではベトナムで「王」と呼ばれることすらある高駢もまた、中国からやってきた侵略者の一人に過ぎないということである。そしてこの話はつまり、ベトナムの神々が中国人支配者の力を上回っていたということを示そうとするものと読み取れる。

また『粵甸靈集録』には次のような自然をコントロールできる神が多く登場する。

二十三 佑聖顯応王

按『交州記』、王山精也。初雄王有女曰「媚娘」。蜀王求婚、雜侯止之。時有二人、自外来拜求婚。王問之曰、「一是山精、

一是水精」。王曰、「我有一女、豈得兩賢。約來日具礼、先来者与之」。明日、山精将珍宝、金銀、山禽、野獸、先来拜献、王如約嫁之。山精迎回傘円山。水精後至、悔恨不及。乃作雲雨、江水漲溢、率水族追之。山精張網、横截慈廉上流、以扞之。水精從喝江、入沱江襲之。山精神化、呼土人編竹禦之、以弩射之、

水精退走。自此嫌讐、每年常漲水、相攻云。山精屢著靈応、方民頼之。陳重興元年、敕封「佑聖王」。四年、加「匡国」二字。興隆二十一年、加「顯応」二字。

現在のベトナムでも有名な山精、水精の話である。雄王の娘に求婚するために山精と水精はやってくる。雄王の娘は一人しかいないため、礼物を先に持ってきたものと娘を結婚させることを決める。山精の方が先にやってきたために、雄王は娘を山精のところへ嫁がせる。後でやってきた水精はそれを恨んで雨をおこし、川の水を氾濫させて眷属とともに山精のもとへ向かうも、山精に撃退される。その後も毎年、水精は川を氾濫させて山精を攻めようとする。

雨季には急激な増水・洪水のおこる紅河デルタの起源譚ともいえる話だが、洪水を起こす水精をおさえる強大な力があるとされるのが山精である。ここで山精が雄王の娘を連れて帰った場所が傘円山である点に注目したい。傘円山はその傘に似た風貌から名が付けられた山で、ハノイ市の西北約三十キロに位置している。水精の力をも圧倒する山精がいるとされる傘円山は李朝期には降雨のコントロールをする神としてあがめられていたようで、『大越史記全書』本紀卷之四、一一四五年の七月条には李英宗（在位一一三七〜一一七五）が傘円山神の祠を造ったことが記されている。

英宗の祈雨に関する話は他にもある。

五 微聖王

王姓微、諱側、峯州麓冷峒貉将之女、朱鷲詩索之妻也。時交州刺史蘇定、貪暴以法殺詩索。王為夫報讐、乃与其妹微貳、起兵攻蘇定、略取嶺南六十五城、自立為王。漢帝聞之、怒誅蘇定

于儋耳、遣馬援來侵、与之戰于浪泊。王退保樊溪、与其妹拒漢兵、勢孤陷沒。国人哀之、立祠祀之。歷代尊為福神、祠在喝江上。

李英宗時、因大旱、命淨戒禪師禱雨。天將雨、涼氣襲人。帝寐、見二女冠芙蓉冠、綠衣束帶、駕雨而來。帝怪問之答曰、「妾即徵氏姊妹也。奉玉帝命、行雨而來」。帝請益作風、拳手止之。

帝覺命修祠致祭、尋命迎回京師、建雨弥堂奉祀。後又命立祠于城外、敕封「靈貞二夫人」。陳重興四年、封姉為「威烈夫人」、妹為「敬勝夫人」。興隆二十一年、加姉夫人「純貞」二字、妹夫人「保順」二字。

こちらも現在のベトナムで英雄として尊敬されている Hai Ba Trung (徴姉妹) の話である。彼女たちは生前は交州刺史の横暴に抵抗し、一時は王を自称した。死後は福神として祀られ、英宗の時の大旱の際に雨を降らせにやってくる。英宗が皇帝だった時の大干ばつは深刻なものであったのか、『粵甸幽霊集録』には英宗の祈雨の話がもう一話(十八話)ある。そして指摘しておきたいのは、対外戦争に活躍した神の事跡を記した書である『粵甸幽霊集録』において、英宗の登場回数はこの二話と少ないものどちらも祈雨の話で対外戦争とは関係のない点である。

『天越史記全書』には皇帝の祈禱をする記事が多くあるが、その多くが祈(止)雨に関するものであることは、皇帝にとって天候をコントロールすることがいかに重要であったかを物語る。『粵甸幽霊集録』においても、天候の支配に関する神が多く登場するのはそれを裏付けよう。すなわち四話、五話、十八話、二十四話の神が祈(止)雨の願いに応じて天候をコントロールする。

その他に帝位継承争いの際に皇太子の即位を手助けする神(十二話、二十話)や、帝の危機を救った神(十三話)の話などがある。こうして

みてゆくと、対外戦争で活躍した神以外で『粵甸幽霊集録』に記載のある神は、ベトナム国内の安寧を守る神、更にいえば王権の安定を守る神といつてよい。つまり『粵甸幽霊集録』に記される神はベトナムの内外における脅威を取り除く神々を祀った書であると述べることができる。

【表一】『粵甸幽霊集録』の神の功績

歴代人臣							歴代人君 (附后妃)				目録	対外	国内			
十七	十六	十五	十四	十三	十二	十一	十	九	八	七				六	五	四
果毅剛正王	回天忠烈王	証安佑国王	却敵威敵二大王	太尉忠惠公	都統匡国王	洪聖佐治大王	国都城隍大王	太尉忠輔公	校尉威猛大王	威明顕忠大王	貞烈夫人	徵聖王	社壇帝君	趙越王後李南帝	布蓋彰信大王	嘉応善感靈武大王
南詔	韃靼	南詔・南漢・宋・韃靼	宋		占城	占城	占城・宋	南詔	占城	占城	占城	後漢	梁	唐・南漢	林邑・南詔	
				帝の危機を救う	後継者争いを解決	獄神	ハノイの城隍神					天候のコントロール	天候のコントロール		獄神	

英霊		浩気	
十八	応天化育元君	占城	
十九	広利大王		ハノイの城隍神
二十	盟主昭感大王	占城	後継者争いを解決
二十一	開元威顕大王		福を祈る場所となる
二十二	冲天威信大王		帝に繁栄の神託を下す
二十三	佑聖顕応王		
二十四	開天鎮国大王		天候のコントロール
二十五	忠翊威顕大王	征討	
二十六	善護国公	南詔	
二十七	利済通霊王		帝の命令で珠をとる

五 おわりに

十四世紀に李済川によって編纂された『粵甸幽霊集録』は、ベトナムの国内外の脅威を防ぐ神々を記した書といえる。具体的には中国、モンゴル、南詔やチャンパーといった対外的な脅威を撃退する神、国内の安寧のために帝の祈（止）雨に応じる神、命の危険にさらされる帝を救う神など王権を守るための様々な問題に対処する神がいる。そのことはつまり、国家祭祀の対象であった神は、ベトナムの安寧、王権を維持するための神であったということを意味しよう。

最後に、『粵甸幽霊集録』において李英宗の話が語られる意義に関して考えてみたい。英宗は李済川が記した人物の内、陳朝の皇帝をのぞくともっとも新しい皇帝にあたる。英宗の登場する五話、十八話はそれぞれ対外戦争でも活躍した神であるが、そこにあえて国内の問題（干ばつ）をかかえる英宗の話までも記録したのであるうか。

おそらくそれは、ベトナムの歴史上において李英宗が果たした役割と関係があるう。『大越史略』をみると、李英宗は一一七四年、宋に安南

国王に封じられている。⁽²⁸⁾ 中国皇帝によるベトナム皇帝への王号除授のありかたは『抑奇遺集』巻之六、国書宝訓大全・輿地志に詳しいが、重要なことは英宗の時にはじめて、ベトナムは中国より「安南国王」に封じられた、国として認められたという点である。英宗には『大越史記全書』一一七二年に海島南北藩界を巡幸し、風物を図に描かせるといった記述もあり、国土や領域に関心があった皇帝ともいえる。

つまり李英宗はベトナム史上、はじめて中国の内臣という立場から抜け出した皇帝といえるのである。対外戦争の勝利に功績のあった神を中心に記した『粵甸幽霊集録』にとって、この英宗の業績は輝かしいものに映ったに相違ない。たしかに『粵甸幽霊集録』には英宗の話は二話とそれほど多くはない。しかしあえて、対外戦争とは関係のない英宗の話を書いていくことに、李済川の意図があるようにみえるのである。

【参考文献】

- ・ Yamamoto, Tatsuro. (1970). Myths Explaining the Vicissitudes of Political Power in Ancient Vietnam. *Acta Asiatica* 18: 70-94.
- ・ Trinh Dinh Ru dich, Dinh Gia Khanh gioi thieu va hieu dinh. (1972). *Viet dien u linh. Hà Nội: Văn học.* (『越甸幽霊』)
- ・ 片倉穰 (1972) 「ベトナム・中国の初期外交関係に関する一問題―交趾郡王・南平王・安南国王等の称号をめぐって―」『東方学』44: 99-105.
- ・ 後藤均平 (1975) 『ベトナム救国抗争史―ベトナム・中国・日本―』新人物往来社。
- ・ Taylor, Keith W. (1976). The Rise of Dai Viet and the Establishment of Thang-Long. *Explorations in Early Southeast Asian History I The Origins of Southeast Asian Statecraft*, edited by Hall and Whitmore: 149-191.

・ Taylor, Keith W. (1986). Note on the Việt điện u linh tập. *The Vietnam Forum*, 8: 26-59.

・ 白石昌也 (1983)。「ベトナムの「まち」―特に「くに」との関連を中心として」『東南アジア研究』21(1): 97-113.

・ 陳荊和編校 (1984-1986) 『大越史記全書』(上中下) 東京大学東洋文化研究所附属東洋学文献センター刊行委員会

・ 陳荊和編校 (1987) 『校合本大越史略』(創価大学アジア研究所叢刊第1輯) 創価大学アジア研究所

・ 古田元夫 (1991) 『ベトナム人共産主義者の民族政策史―革命の中のエスニシティー』大月書店

・ 黎崱撰・武尚清點校 (1995) 『安南志略』(中外交通史籍叢刊) 北京: 中華書局

・ 宇野公一郎 (2004) 「ベトナム朝廷による神界の管理について」『東京女子大学紀要論集』54(2): 107-120.

・ 孫遜・鄭克孟・陳益源主編 (2010) 『越南漢文小説集成(第2冊)』(域外漢文小説大系) 上海: 上海古籍出版社

・ 桃木至朗 (2011) 『中世大越国家の成立と変容』大阪大学出版会

【付】

本研究は二〇一五年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)の研究成果の一部である。

注

- (1) 現在のベトナムは南北一六五〇キロに及ぶ細長い本土および島嶼からなる地域をいうが、本論文で使用する「ベトナム」は基本的には十四世紀以前の「大越」と呼ばれた地域をさす。具体的には現在、「北部ベトナム」と呼ばれる地域で、中国国境に連なる「東北」、ラオス国境に連なる「西北」、首都であるハノイのある「北部平野」および北中部に含まれるタインホア、ゲアン、ハーティン省をいう。
- (2) 『粵甸幽霊集録』の書名は『越甸幽霊集録全編』、『粵甸幽霊』、『新訂較評越甸幽霊集』、『越甸幽霊』等テキストによって様々である。本論文では、現在もつとも古態をとどめるとされるX339(東洋文庫蔵)にしたがい、書名を『粵甸幽霊集録』に統一した。なお引用する本文は特に断りのない限り、X339による。字体に関しては新字体に統一した。
- (3) たとえば李濟川の『粵甸幽霊集録』に「按録」をほどこした金冕韎、十五世紀に話を増補した阮文質、十六世紀に話を増補した黎似之がおり、そして一七二二年には黎純甫が校訂して跋を加えている。さらに十九世紀に高輝耀が注と評を加えており、呉甲豆は一九一九年に「英烈正気」の項目を重補した。またそれとは別に一七七四年に、諸葛氏が新たに『新訂較評越甸幽霊集』を編纂している。
- (4) それぞれ記述内容から、『交州記』は北属期(唐時代)、『史記』および『報極伝』は李朝時代のテキストと考えられる。
- (5) 目録の漢数字および神の数(位)は簡便のために筆者が付けた。
- (6) 三話の「趙越王後李南帝」は目録では一話となっているが、実際には「超越王」、「李南帝」と二話の話である。しかし諸本の多くは二神を一話にまとめて書いているため、本テキストも話を分けることはせず目録のままにした。また五話の「徵聖王」は姉妹神で二神

が登場する。そのため神の合計は八位となる。

- (7) 十四話の「却敵威敵二大王」は兄弟神で二神が登場する。そのため神の合計は十二位となる。

- (8) 諸本によっては「書火正掌」とある。『大越史記全書』には陳朝期に「内書火正掌」という役職の者が一二八〇年条、一二二六年条、一三二六年条と李済川とほぼ同時期に登場する。今回は底本に従っておくが、「書火正掌」が正しいか。

- (9) 『安南志略』巻第十四「官制」近侍官

- (10) 例外は五話「徵聖王」、十三話「太尉忠惠公」、二十四話「開天鎮国大王」の三話である。五話は重興元年の神号付与がなく、十三話は重興元年の神号贈号の後にある美字の追号が、「後」とあるのみで何年かわからない。二十四話は重興元年の神号付与がなく、その後にある神号の贈号も「四年」とあるのみで重興年の出来事が不明。

- (11) [後藤 1975]、[Taylor 1986]、[宇野 2004]

- (12) 第一次モンゴル侵略は元豊七年(一二五七)にあった。なおその時の出来事を記した話が『粵甸幽霊集録』十六話、十七話にある。十六話は三章の一部を引用した。

- (13) 現在のベトナム中部に二世紀末ころに建国された王国。後漢から自立し、七世紀以後は滅亡までチャンパーというインド風国名を名乗った。後漢から自立した時期は中国では林邑と呼ばれていたが、九世紀後半以後は占城と呼ばれた。

- (14) 南進は、ベトナムがインドシナ半島の海岸平野沿いに南に版図を拡大し、最終的にはメコンデルタまで版図を拡大していく過程をいう語。

- (15) [古田 1991]、[桃木 2011]

- (16) 事実、『大越史記全書』には本紀巻之五、一二八八年条に「初、元

人嘗発昭陵欲壞之、而梓宮不犯、及賊敗、石馬之足皆沾泥、蓋神靈陰相也」と、モンゴル軍を撃退する際に神霊が陰で手助けをしていた記事や、本紀巻之六、一二二二年条に「加封各処名神」と、チャンパーへの親征勝利後に功績のあった神への神号加贈があった記事が載る。

- (17) [Taylor 1986]、[宇野 2004] は対外戦争以外の神にも触れているが、網羅的には扱っていない。

- (18) 題名が目録と異なる話もあるが、今回はすべて目録にあるものを使用した。

- (19) 注(13) 参照。

- (20) 二話「布蓋彰信大王」の馮興も呉権の時に南漢を撃退するのを手伝う他に、「凡有奸盜及疑獄、詣廟前盟、即見顯応、香火日盛」と盗みや疑獄の時に靈験をあらわす神ともされる。

- (21) 『嶺南摭怪』にも靈跡を巡る高駢の話がある。また後代のテキストに高駢を著者として仮託した『高駢遺稿』といった風水資料があり、ベトナムにおける高駢の風水師としての一端がうかがえる。

- (22) [Yanamoto 1970]、[白石 1983]

- (23) 本話は『大越史記全書』や『嶺南摭怪』などにも載り、現在でもベトナムの神話として有名な話の一つである。

- (24) ベトナムの建国説話にあらわれる王の称号。

- (25) 紅河水系とタイピン水系のつくった一五〇万ヘクタールほどのデルタ。

- (26) 本条は四月に祈晴がなされており、おそらくそれが叶ったことに関係すると思われる。また『大越史略』巻二、一〇七二年条(『大越史記全書』では一〇七三年の出来事とされる)にも傘円山神に祈晴をしている。

(27) 二十七話「利濟通靈王」など、必ずしも王権の安定を守るための神とはいえない神もいるが、それでも皇帝の何らかの願いを叶える神であるという点ほどの神も満たしている。

(28) 『大越史略』巻二、一一七四年条。なお『大越史記全書』では本紀卷之四、一一六四年条にのる。この年の違いに関しては〔片倉1972〕を参照。

(29) 『抑齋遺集』巻之六、国書宝訓大全・輿地志「天王册章有曰、粵南南越交趾安南南平、今亦曰粵南、册金册、章龍章也。按帝明授涇楊王粵南王、漢授趙南越王。宋授丁、黎、李、曰交趾郡王、尋進南平王、崩後進南越王。至李英宗時、改交趾爲安南国、封帝安南国王、賜国王金印、安南称国、自李始、後陳以来皆倣此」。

(30) 『大越史記全書』本紀卷之四、一一七二年「帝又巡幸海島南北藩界、凶記風物而還」。

(x) のあいこ 明治大学大学院博士後期課程、日本学術振興会特別研究員